

Rahim Acar
*Talking about God and Talking about Creation:
Avicenna's and Thomas Aquinas' Positions*
Brill, 2005, pp. x + 250

小 林 剛

本書は著者が2002年にHarvard Universityに提出した博士論文を基にして、Islamic philosophy, theology, and science 第58巻として出版したものである。著者は本書出版2005年当時、トルコのイスタンブールにあるMarmara UniversityのDivinity SchoolでResearch Assistantを務めている。本書は、神学言語と創造に関するアヴィセンナとトマス・アキナスの哲学的立場をめぐる比較研究である。著者はまず第1部（第1, 2章）“Talking about God”で神学言語について議論し、それを前提として第2部（第3, 4章）“Talking about Creation”で、神による創造の働きの本性と、宇宙の時間的始まりについて議論する。

第1部のAcarによれば、アヴィセンナとアキナスは神学言語に関して次の二点で合意している。一つは、我々は神自身を直接は知らず、神に関する我々の知識は被造物に由来するという点である。このことは、我々が神について「～(である)」と述語付ける際、その述語は被造物に由来するものであるということを含意する。もう一つは、神と被造物双方に述語付けされる完全性（「完全(だ)」「存在(している)」「善(い)」「真(だ)」など）は、同名同義的に述語付けられるのでもなければ、同名異義的に述語付けされるのでもないという点である。

しかし、アヴィセンナによれば、神自身に述語付けされる完全性は「存在」だけである。その他神に述語付けされる完全性はすべて「存在」に（正確に言えば「自存する純粹存在」に）還元される。つまり、その他の完全性は、被造物の特質をただ否定するだけのものであるか、あるいは、神は被造物の諸特質の原因ではあるけれども、それらとはまったく似ていないということを述べるだけのもの

なのである。そしてアヴィセンナは、この後者のように創造との関係で神に述語付けられる完全性（「知識」、「意志」、「行為」など）はすべて、互いに実在的に異ならないだけでなく、概念的にも異ならないと主張する。それゆえ彼は、後に見るように、現実在るものと在り得たものとを区別しないのである。

これに対してアクィナスは、神に述語付けされる諸々の完全性は、実在的には互いに異ならないが、概念的には互いに異なると主張する。アクィナスによれば、被造物に述語付けされる諸々の完全性は、神に第一により適切に属するものであり、神にこそ固有に文字通り述語付けされるものなのである。ただしそのことは、その述語によって「意味表示される事柄 *res significata*」に関してだけであって、「意味表示の仕方 *modus significandi*」に関してではない。

Acar に言わせれば、アヴィセンナは、神はすべての完全性を有していると述べることに、神の属性は否定や関係性に過ぎないと述べることに間で揺れ動いている。しかしどちらかと言えば後者を強調するので、アヴィセンナの場合神に完全性はないのだと主張する人々が出てきた。だがこのように解釈してしまうと、神と被造物双方に述語付けされている完全性は全く同名異義的なものとなってしまい、述語付け自体が無意味になる。Acar に言わせればアヴィセンナはただ、完全性を神と被造物とに一義的に述語付けすることを否定しようとしただけなのである。実際彼の述語付け理論は明確なものではなく、彼の神学言語において中心的な役割を果たしているわけでもないのである。

第2部の Acar によれば、アヴィセンナとアクィナスは創造に関して次の三点で合意する。①神は意志によって創造する。創造は意志的働きであって、自然的働きではない。②神の意志の目的は神自身であって、他のものではない。神は第一に本質的に神自身を意志する。他のものに係わる神の意志は神の自己意志に含まれる。神は自己自身を意志することによって他のものを意志する。③神は神であるために創造することを必要としない。外部のものに創造を強制されることもない。神の存在は神以外のものの実在に依存しない。その意味で神は自由な創造者である。

しかしアヴィセンナは神の自由選択は否定する。彼によれば、実在するものはすべて神の本質に必然的に付随する。神は実在するこの宇宙しか意志しない。ただだからと言って、神は神であるために実在の宇宙に依存し、それによって自存しているわけではない。それは彼に言わせれば、二人の人が互いに友であるの

は、互いに助け合うことによってではないが、しかし、友であるということには必然的に、互いに助け合うことが付随するのと似ているのである。

Acar に言わせれば、上記のようなアヴィセンナの立場では、神が神であるために創造することを必要としないと主張することは難しい。アヴィセンナに従えば、他のものに係わる神の意志は神の本質に含まれていなければならないので、創造するということが神の本質の構成要素であり、神は神であるために創造しなければならないと考えざるを得ない。そうだとすると、神は自身の自然本性の故に創造するという意味で自然的創造者であるということになってしまう。

これに対してアクィナスは神に自由選択を認める。アヴィセンナは自由選択を、人間が行う自由選択のように、先在する多くの選択肢の中から選ぶことと理解し、これでは、神から独立しているものを認めることになってしまうと考えた。これに対してアクィナスが理解した神の自由選択とは、実在している被造物は、神が創造してできたもののすべてではなく、神はそれ以外のものも創造できたということの意味している。

このようにアクィナスによれば、神の意志を、神の不変性や永遠性など神の存在の仕方から引き離して考察すれば、この宇宙の實在は必然的ではない。しかし、共に考察すれば、神の意志は不変であり、神が意志するものを意志しないことはできないので、この宇宙の實在は必然的である。このような必然性は、絶対的必然性と区別して仮說的必然性と呼ばれる。

これに対してアヴィセンナは、仮說的必然性を絶対的必然性と区別しない。なぜなら彼は神の意志を神の存在の仕方と決して区別しないからである。つまり第1部で述べられた通り、現実在るものと在り得たものとを区別しないのである。しかし Acar に言わせれば、アヴィセンナが主張する宇宙の必然性は、本当はアクィナスが主張する仮說的必然性に相当するものなのである。

以上のように Acar は、神学言語と創造に関しては、アクィナスの主張をアヴィセンナの主張に比べより完全なものとなししているようである。だがそれとは対照的に、宇宙の時間的始まりに関する議論については、Acar はアクィナスの主張に懐疑的である。

Acar によれば、アヴィセンナは、宇宙に時間的始まりはあり得ないと主張している。一方アクィナスは、宇宙に時間的始まりがあるかないかは、哲学的根拠によっては証明できないと主張している。

時間とは変化の尺度であるが、創造は無からの産出であって、何かから何かへの変化ではない。しかも、変化は可變的事物において生じるが、この宇宙には非時間的事物が存在するとされている。アキナスは、宇宙が創造される以前には想像上の時間が存在すると主張するが、しかし Acar は、もしそうであるならば、宇宙の時間的始まりも想像上のものであり、実在的なものではないはずであると反論する。

アヴィセンナもアキナスも、新プラトン主義と結びついたアリストテレス的な時間概念を採用しているが、アヴィセンナの主張の方がアキナスの主張よりもこの概念により忠実である。アキナスのような主張をするためには、新プラトン主義やアリストテレスの時間に関わる概念を根本的に修正する必要がある、それをしないかぎり、アキナスのような主張は難しいと Acar は主張する。

私は次の二点で本書には非常に大きな学術的意義があると考えます。まず第一に、トマスが神に自由意思・自由選択を認めることができたのは、『神学大全』第1部第11問第3項などで語られる「意味表示される事柄」と「意味表示の仕方」の区別などのトマスの神学言語理論があったからこそであるということ、アヴィセンナの神学言語理論との比較を通して説得的な仕方ですべて示している点である。神に自由意思を認める哲学的根拠を持つということは、西欧キリスト教社会で哲学が生き残っていくためには是非とも必要なことであったと思われる。そして第二に、『離存的実体について』第10章などで語られる創造をめぐるトマスのアヴィセンナ批判がどこまで妥当なのかという問題について、アヴィセンナのアラビア語テキストの検討を通して或る程度回答を与えている点である。

ただ一つ残念なことは、本書では、重要なテキストを引用して、その解釈を詳細に分析したり、他の解釈の可能性を検討したりするということがまったくなされていないという点である。その一方で、中世形而上学の比較的基礎的な概念やテーゼの解説が必要以上に繰り返されている。本書のテーマについて或る程度知識をお持ちの方は、序論と、各章の結論付近から読み始め、議論の争点とその行方を或る程度見定めてから、全体を注意深く読みなおし、重要な箇所について註を手掛かりに一次文献に当たられることをお勧めしたい。
